

じろうべえ

「カツパと治郎平」

おかしなあ、川合かわいに百姓ひやくしやうの治郎平ちゆう人がおったんやと。

ほうや、ちようど夏の暑あつい日あつで、いく人もの子どもあつもらが、

水浴みずあびをしてたんや。

ほたら、助作すけさくちゆうもんが、カツパに足をひっぱられて、

川にしずんでしもたんや。そこで、村は大きわぎになって、カツパをやっつけようということになった。村の人は、カツパがすもうを好きなことを知ってるさかいに、治郎平が、

「わいが、カツパをすもうでやっつけてきたる。」

ちゆうて、川に行きよった。

治郎平は、つりざおをもって行ったというこっちゃ。

川の中ほどまで来ると、つりをするまねをしよったんや。

カツパは、自分どてがつかれるとかなんと思あがってか、土手どてに上あがって

きよった。そして

「すもうとろう、すもうとろう」

とゆうたそうや。

「ここが、治郎平の見せどころやな。ちえをはたらかして、しらんふりをしていたんや。」

カツパは、カンカンにおこって、治郎平に飛びかかろうとしたんや。ほしたら、治郎平は、すくっと立ちあがって、こーういいよったんや。

「カツパよ、もしわいが勝かったら、もう二度とわるさをせんと約束やくそくするか。」

カツパは、すもうがとりたかったので、

「わかった。わかった。はよすもうとろう。」
ちゆうたそーうな。

そこで治郎平は、ちえをはたらかして、さか立だちをしたんや。

カツパもまねをしたら、皿さらの水がなくなってもた。

ほんで、すもうをとっても負まけてしもたので、泣ないて帰かえったそーうや。

それからというもの、カツパは二度と村にどとにあらわれることは

なかったそーうや。

もうこんで、しまい。

「きのもとのおかし話」木之本町教育委員会より